

〔秋苑日涉三〕凌牀

秋田人當冬作小坐牀拽水上滑溜如箭俗謂之速履所謂凌牀耳按日下舊聞引倚晴閣雜抄曰江隣幾雜志雄霸沿邊泊冬月載蒲葦悉用凌牀沈存中筆談信安滄景之間挽車者衣韋袴冬月作小坐牀水上拽之謂之凌牀今京師在處有之一人挽行滑如帆駛聞明時積水潭嘗有好事者聯十餘牀攜都籃酒具鋪氍毹其上轟飲水凌中亦足樂也香祖筆記曰隣幾雜志雄霸間塘泊冬月載蒲葦皆用凌牀雖官員亦乘之今京師之俗猶然謂之水車

〔永久四年百首冬〕初雪

兼昌

はつみゆき降にけらしなあらし山こしの旅人そりにのる迄

〔久安六年御百首冬〕

尾張守親隆朝臣

跡たえてあらしの山の雪ごえにそりのつなでを引ぞ煩ふ

〔山家集上〕雪のうたよみけるに

たゆみつ、そりのはやをもつけなくにつもりにけりな越の白雪

〔北越雪譜二編一〕輶

輶字彙禹王水を治し時載たる物四ツあり水には舟陸には車泥には輶山にはかたじき標註書經註 玄かれば

此輶といふもの唐土の上古よりありしぞかし彼は泥行の用なれば雪中に用ふるとは製作異なるべし輶の字、叢藪橋、秧馬、諸書に散見す、或は雪車、雪舟の字を用ふるは俗用なり、

そもく、此輶といふ物雪國第一の用具、人力を助事船と車に同く、且に作る事最易きは圖を見て知るべし、略○中前にも玄ばく、いへることく、我國後○越の雪冬は凍ざるゆゑ冬に輶をつかへ

ば、雪におちいりて墮おちことならじ輶は春の雪、鐵石のごとく凍たる、正二三月の間に用ふべきもの也、其時にいたるを、里俗輶道そりみちになりしといふ、